

研究・調査報告書

報告書番号	担当
31	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Epidemiology of pancreatic cancer in Japan: a nested case-control study from the Hospital-based Epidemiologic Research Program at Aichi Cancer Center (HERPACC). 日本における膵臓がんの疫学調査: 愛知県がんセンター疫学調査の nested case-control study	
執筆者	
Inoue M, Tajima K, Takezaki T, Hamajima N, Hirose K, Ito H, Tominaga S.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Epidemiol. 2003 Apr;32(2):257-62.	
キーワード	
すい臓がん、危険因子、日本、コホート内症例対照研究	
要旨	
<p>日本人における生活習慣と膵臓がん発症危険度との関連を検討した。対象は、1988～1999年に愛知県がんセンター疫学調査に参加し、開始時質問紙調査に回答したもののうち、膵臓がんが発生した200名および年齢階級を合わせた非がん外来通院患者2000名とした。交絡因子を調整したロジスティック重回帰分析により危険因子を検討した。</p> <p>その結果、膵臓がんの家族歴(オッズ比: 2.09, 95%信頼区間: 1.01～4.33)および糖尿病の現病歴(オッズ比: 1.79, 95%信頼区間: 1.08～2.97)が膵臓がんの危険度を有意に増大させていた。一方、週2回以上の定期的な運動習慣(オッズ比: 0.66, 95%信頼区間: 0.43～1.01)、定期的な排便習慣(オッズ比: 0.70, 95%信頼区間: 0.49～0.99)毎日の生野菜摂取(オッズ比: 0.71, 95%信頼区間: 0.51～0.99)は予防的な因子であった。飲酒に関しては、「まったく飲まない」群と比較して「現在飲んでいる」群は膵臓がん発症危険度が低く(オッズ比: 0.50, 95%信頼区間: 0.34～0.73)、「やめた」人は逆に危険度が高かった(オッズ比: 3.70, 95%信頼区間: 2.28～6.00)。喫煙については、「現在喫煙している」は膵臓がん発症危険度とは関連しなかった(オッズ比: 1.14, 95%信頼区間: 0.75～1.74)のに対し、「やめた」人は危険度が低い傾向にあった(オッズ比: 0.60, 95%信頼区間: 0.35～1.00)。多量喫煙者は少量喫煙者と比べて膵臓がん発症危険度を増大させていた(オッズ比の傾向性の検定: $P < 0.05$)。また喫煙開始年齢については、若年開始であればあるほど高危険度であったが、その傾向は統計学的には有意ではなかった。喫煙期間や喫煙係数(1日あたりの喫煙箱数×喫煙年数)と膵臓がん発症危険度との間に明らかな傾向は見出せなかった。</p> <p>飲酒については、止めることによって膵臓がんの危険度が高まるよりは、むしろ、体調に変調をきたしている対象者が禁酒したものと考えられ、前向きコホート研究ではあるが、原因と結果の逆転を避けきれなかった可能性があると考えられる。</p>	